

さあ夏休み

今年の夏は？



どうぞ 暑さしのぎにおいで下さい

去年はとんでもない暑さが続き、ひたすら暑さが和らぐのをまち続けたように思います。ダウンしないように電気代が少し高くなってもエアコンをかけて暑さをしのぐように、特にお年寄りの方へ注意喚起がありました。ですが電気代も気になりひたすら辛抱の方が多かったのでは…。どうぞ、この夏、遠慮なく「ふれあい倶楽部」にお越しください、なんのおもてなしも出来ませんが、クーラーの効いた部屋があります、和室もあります、お茶を1本持って誘い合ってお越しください。みんなで高校野球のテレビ観戦、世間話でひとときくつろいだり、ゴロっと横になってもいいです。

7月20日(土)～8月28日(水)夏休み

小中学校は7月19日(金)終業式。いよいよ夏休み。5月の10連休で1学期登校日が例年に比べて少なそう？そのせいか2学期始業式は9月ではなく8月29日。子どもたち、ラジオ体操、地区水泳、お盆、地藏盆、部活、大会…この夏、いつもと違う生活でわくわく。友達どうしの時間、遊びも多くなります。気が緩んで交通ルールが守れなかったり、危険な遊びがあるかも知れません。地域で見守り是非お願いします。

(予告)11月 バス旅行

予定11月10日(日)信楽

例年、ようかにちなんだ場所を研修旅行先としておりましたが、そのネタもつきました。今年は一転、フリーで行先を三役会で検討しました。「信楽」。詳しい案内は後日のふれあい通信でお知らせします。



夏、町内の雑草が目立つようになりました。まつりは近づくと、こざっぱりとなればいいのだが、と思いつつ。八木川は刈払い機でスッキリ。ここ市役所前は7月6日(土)に大勢のシルバー人材のみなさんが草取りなど精を出していました。シルバーさんの仕事としてではなく、ボランティアとしてだそうです。毎年、夏まつりの前にこうして会員さんが汗を流していただいております。ありがとうございます。

●お知らせ 8月のふれあい喫茶は休みます。

傷痍軍人の碑について 知って下さい

天子区のみなさんは知っているかも知れませんが・・。

●8月には広島、長崎に原爆が落ち終戦を迎えた月です。先の大戦で亡くなった方、傷ついた方を思い、改めて平和を願うのも大事なことです。関連して天子の地に「傷痍軍人の碑」があることをこの機会に知って下さい。平成8年の建立60周年記念誌が手元にありますのでその一部を紹介します。

●傷痍軍人は、戦争で傷ついた方を言います。

この碑は、但馬地区の傷痍軍人の碑です。当時の八鹿町、豊岡町・・など13の町名と、高柳村、伊佐村、宿南村・・など25の村名が読めます。

●昭和11年建立が最初です。この時点で日清、日露、満州事変等で傷ついた軍人87名が正面向かって左の大きな副碑に刻まれています。

●その後、太平洋戦争で傷ついた方740名が向かって右神社側に2列に並んだ13基の副碑に刻まれています。

●合わせて830名余のお名前があります。

●天子の地に建たいきさつは、日清、日露、満州事変で傷ついた方々が但馬地区に傷痍軍人の碑を建立しよう・・ということになり、各町村より世話人が集まり建立場所を相談。天子の地にある屋岡神社の敷地の一部を使わせていただけないかと、天子地区と話し合いをし、87名が恩給の一部を浄財として拠出しこの地での建立の運びとなったようです。その後、度々、記念碑や植樹が行われています。

●正面にある「傷痍軍人の碑」の碑文は、初代の大日本傷痍軍人会会長であった本庄陸軍大将が揮毫。鳥居をくぐってすぐ右には昭和42年に整備した東井義雄先生(但馬の偉大な先人)の碑文があります。

●清掃、維持は・・

時が経ち傷痍軍人のみなさんも亡くなったり歳をとりました、今は傷痍軍人会はありません。今、その清掃、維持は地元、屋岡神社、天子区の方が受け継ぎコツコツと行っています。とりわけ今年は綺麗に管理されています。

●旧幼稚園のグラウンドの隣です。

是非、一度お立ち寄りください。

事務局です

今月のこの記事は、どうしても書きたかった。「私達傷痍軍人は国の為とは言いながら負傷し、病魔に犯され父母妻子に多大な苦勞をかけて来ましたが、戦争のない平和な日本を祈念し建立した碑です、末永く守って行きたいが・・。」と後の維持について市役所に相談日参していた当時の会長さん、それを役所仕事として受け入れることが出来ない市役所の立場、現実のはざままで焦燥していた会長さんの姿がいまだに忘れることが出来ません。固い記事ですが是非一読下さい。

東井先生の碑文があります それをを現代語に訳していただきました

私達の育ってきたこの美しい国土は、私達の先祖の眠っているところである。

その長く続いてきた歴史やすばらしい文化は、先祖が創りあげてきたものである。これらを引き継ぎ、守っていき、さらに未来に輝かせるのは私達の責任であり、努めである。

このために、先輩や先人達は「海で戦えば水の中の屍(しかばね)となり、山で戦えば草むらの中の屍となるだろう」との覚悟で、その若い命をあえて祖国日本のために捧げられたのだ。

私達もまたこれに続こうとして、国家存亡の時に、ある者はその生身の腕を捧げ、またある者は自分の身体が傷つくまで捧げてきた。そして身体には大きな傷が残る身となったが、後悔することはなかった。

ところが、戦に敗れると世のなかのあり方は混乱し、人の道は逆転、世のなかの風潮はにわかに冷たくなり、私達の傷の痛みとなってしみてくるようになった。私達は老父母妻子を抱えて幾度嘆き悲しんだことか。

しかし、これによく耐えて、私達を日本再建のために立ち上がらせたのは、輝かしくまつてもらうことを願うのではなく、自分の身をかえりみずしかも喜んで日本の永遠の平和を祈ってきた天子の森の傷痍軍人の碑とそこに醸し(かもし)出されている傷痍軍人の精神であった。ああ何と尊いことか。私達この気持ちをついでいこうとする者は、ここに名前を記して傷痍軍人碑の副碑を建て、偉大であった先人の方々と共に永遠に我が祖国と民族の輝かしいことを祈るものである。昭和42年9月23日 但馬傷痍軍人連合会

傷痍軍人の碑



東井先生の碑

